



TITLE:

# アゼルバイジャン人の誕生( Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

塩野崎, 信也

---

CITATION:

塩野崎, 信也. アゼルバイジャン人の誕生. 京都大学, 2016, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2016-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k19432>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	塩野崎 信也
論文題目	アゼルバイジャン人の誕生		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本博士論文は、現在のアゼルバイジャン共和国（以下、この領域を「南東コーカサス」と呼称する）と、イラン・イスラム共和国の北西部（以下、「アーザルバーイジャン」）に分布する民族であるアゼルバイジャン人の民族意識形成の過程を扱っている。</p> <p>まず、「アゼルバイジャン」という地名は、もともとアラズ川の南側のアーザルバーイジャン地方だけを意味していた。これが段階的に拡大し、南東コーカサスをも含む地名へと変化していった。まず、16世紀後半に「アゼルバイジャン」の北限がアラズ川からキュル川へと移動する。それまで「アッラーン」や「ガラバグ」と呼ばれていた領域が、「アゼルバイジャン」の一部とみなされるようになったのである。この地理認識は17世紀前半には定着し、オスマン語やヨーロッパ諸言語の作品でも見られるようになった。そのキュル川以北の地であるシルヴァーン地方も、18世紀には「アゼルバイジャン」の一部とみなされるようになった。少なくとも19世紀後半のペルシア語の地理書や歴史書においては、この地理認識は一般的なものとなっている。一方で、このような地理認識は、南東コーカサスにおいては一般的ではなかった。「現地」の知識人や詩人たちは、「アゼルバイジャン」に何ら特別な感情も抱いていなかった（第2章）。</p> <p>南東コーカサスにおいては、11世紀頃から住民のテュルク化が進展、口語も主にテュルク語が用いられるようになっていった。この南東コーカサスのテュルク語に対して、ヨーロッパ言語の作品は「トルコ語」や「タタール語」など、様々な呼称を用いていた。この言語を「アゼルバイジャン語」と呼称し始めたのは、カザン学派の東洋学者ミールザー・カーゼム＝ベクと考えられる。管見の限り1846年の著作における用例が最古であるが、これは1839年まで遡れる可能性がある。彼は、オスマン・トルコ語やカザン・タタール語といった他のテュルク諸語との区別のために、この名称を用いたのだった。以降、この言語名は、ロシアの学界を中心に一部で広まっていく（第7章）。</p> <p>一方で、同時代の南東コーカサスでは、自分たちの言語を主に「トルコ語」と呼称していた。彼らは自分たちの言語が他のテュルク諸語と異なることを認識していたが、一方でこれを他から区別するための言語名を持たなかった。</p> <p>「アゼルバイジャン語」という言語名を最初に受容したのはジェラルル・ウン</p>			

スィーザーデをはじめとするティフリス在住のテュルク系知識人たちで、それは1883年頃のことであった。さらに、言語が「民族」を定義する重要な要素の1つであると考えていた彼らは、やがて「アゼルバイジャン語」の話者である自分たちは「アゼルバイジャン人」という民族である、という認識に目覚める。彼らによって初めて「アゼルバイジャン」が明確に民族の名称として打ち出されたのは、1890年、『托鉢』誌においてであった（第6章）。

「アゼルバイジャン人」は、ロシア語などによる他称「タタール人」や、それまで南東コーカサスで用いられていた自称「カフカースのムスリム」に置き換わる語として提唱された。「カフカースのムスリム」は、単一の民族であるという意識が元来は希薄であった南東コーカサスの住民を、1つの集団として過不足なく表現しえた最初の言葉として重要である。その最初期の用例は、ハサン・ベイ・ゼルダービーらによって1875年に創刊された新聞『種蒔く人』などで確認できる（第5章）。

「アゼルバイジャン人」の原型が「カフカースのムスリム」であることを考えると、ロシア帝国による南東コーカサス征服こそが、アゼルバイジャン民族意識形成の端緒であったとすることができるだろう。ロシア領カフカース地方への編入と、地理的概念、あるいは地名としての「カフカース」の普及によって、初めて彼らは自分たちの民族集団の輪郭を明確に想像することができたのである。この時期の南東コーカサスにおける啓蒙活動を主導した人々の大半がロシア式の教育を受けた人物、あるいは帝政ロシアの官吏などとして働いた人物であったことも重要である。

「カフカースのムスリム」という民族名の成立には、ミールザー・フエテリ－・アフンドザーデが用いた民族名「イスラーム民族」の影響も窺える。19世紀半ばに活躍した作家であり、帝政ロシアの軍官僚でもあった彼は、この言葉を主にイラン、オスマン帝国、南東コーカサスの住民を指す呼称として用いていた。一方で、彼の自他認識が複合的・多重的なものであったことも、見逃せない事実である。彼の帰属意識は、語りかける相手に応じて、「イラン民族」や「トルコ人」、「タタール人」など、様々に変化した。彼が「イスラーム民族」という輪郭の曖昧な言葉を好んだ背景には、自身の出自と帰属意識との齟齬を隠すという意図もあっただろう（第4章）。

このように、「カフカースのムスリム」が登場する以前、南東コーカサス現地の知識人たちの「我々」意識のあり方は極めて曖昧であった。アフンドザーデの一世代前の知識人であるアッバースグル・アーガー・バキュハノフに見る「東コーカサス」という地理認識も、そういった例の1つである。この地理認識においては、シルヴァーン地方とダゲスターン地方の一体性が強く意識される一方で、シルヴァーン地方とアッラーン（ガラバグ）地方との結び付きが

明確ではない（第3章）。

ここで、「民族」とは必然的に存在するものではなく、特定の歴史的状況の産物である、という、近年の民族研究の潮流を思い起こしてみよう。この考え方は、南東コーカサスの事例においても、よくあてはまるように思われる。バキュハノフの「東コーカサス」、アーフンドザーデの「イスラーム民族」や「イラン民族」、ゼルダービーの「カフカースのムスリム」は、南東コーカサスにおいて「アゼルバイジャン人」とは別の民族が形成される余地があったことを示している。現在の「アゼルバイジャン人」は、「イラン人」を名乗っていた可能性もあったし、「東コーカサス人」を名乗っていた可能性もあった。そうならず、「カフカースのムスリム」から発展した「アゼルバイジャン人」が生き残ったのは、必然ではなく偶然であろう。

また、「東コーカサス」や「イラン民族」は失敗に終わったアイディアであったが、一方でバキュハノフやアーフンドザーデが唱導した啓蒙主義は、後の世代に確実に継承されていった。アゼルバイジャン民族意識の形成に貢献した人々の全員が知性と学問の強力さを信じ、一般大衆を無知から脱却させ、自由を獲得させることを目指していた。また、彼らが「簡単な言葉」での説明を重要視したことも見逃せない。美文調の文体や、アラビア語やペルシア語に由来する難解な語彙・表現を廃した彼らのテュルク語は、現代アゼルバイジャン語の基礎となった。

さて、「カフカースのムスリム」を経て「アゼルバイジャン人」が登場した後も、南東コーカサスにおける「我々」意識の輪郭は揺れていた。20世紀初頭に「アゼルバイジャン人」、「アゼルバイジャン語」といった用語がかなりの程度普及・定着していたことは事実である。一方で、この時代においても、多くの知識人たちの自他認識は多重的なものであった。1918年に建国された民族国家の名に「アゼルバイジャン」が採用され、南東コーカサスを指す地名としての「アゼルバイジャン」が定着する一方で、民族や言語の公称は「テュルク」であり続けた。「アゼルバイジャン」が公式の民族名・言語名となるのは、1936年のことである。祖国の名、民族の名、言語の名が一致した時、その民族主義はより強力なものとなったであろう。「アゼルバイジャン人」が真の意味で誕生したのは、この時であったと言える（第8章）。

領域名・言語名・民族名としての3つの「アゼルバイジャン」の提唱（登場）、普及、定着（公式化）を順に追ってみると、アゼルバイジャン・アイデンティティが誕生する過程の複雑さが明らかとなる。すなわち、領域名の登場→領域名の普及→言語名の提唱→言語名の普及→民族名の提唱→民族名の普及→領域名の公式化→言語名・民族名の公式化という、いくつもの段階を踏んで、ようやくこのアイデンティティは形成され、定着したのである。

また、南東コーカサス住民の「我々」意識の変化に注目するならば、19世紀前半の集団としての実体を持たない状況から、1870年代の「カフカース地方に住む、トルコ語を話す、カフカースのムスリム」、1880年代前半の「カフカース地方に住む、アゼルバイジャン語を話す、カフカースのムスリム」、1890年以降の「カフカース地方に住む、アゼルバイジャン語を話す、アゼルバイジャン人」を経て、最終的に「アゼルバイジャンに住む、アゼルバイジャン語を話す、アゼルバイジャン人」へと至った、とまとめることができるだろう。

アゼルバイジャン民族意識はこのようにして成立したわけだが、現代においては、逆にこの民族名を根拠として「大アゼルバイジャン主義」が語られ、南アゼルバイジャン（アーザルバーイジャー）を「取り戻す」運動が行われている。「大アゼルバイジャン主義」は、民族主義に基づく典型的な失地回復運動ではあるが、歴史的事実に即して見る限り、それは誤りと言わざるをえない。「アゼルバイジャン」は、いかなる土地を失ったこともないし、「南北に分断」されたこともない。南東コーカサスがロシア帝国に併合された時点では、現在用いられる意味における「アゼルバイジャン」は未だ存在していなかったからである（終章）。

さて、このようにして見てみると、現在のアゼルバイジャン人の重要な特徴の1つとされる「シーア派」は、民族意識形成の過程に直接関わっていないように思われる。本論文で示されたように、後に「アゼルバイジャン人」となる人々が最初に集団意識を形成した際、その基盤となったのは「カフカース」という地理概念であった。また、用いられた集団名は「ムスリム」であったが、その背景には、スンナ派・シーア派という宗派の区別を超えるという意図があったのである（第5章）。また、後年、「アゼルバイジャン人」の提唱者たちが、他のテュルク系民族から自分たちを区別する際の根拠としたのも、言語の差異であって、宗派の差異ではなかった。そもそも、彼らが「アゼルバイジャン」を民族名とした理由の1つは、宗教によらない呼称を欲したことにある（第6章）。

そうであるなら、サファヴィー朝の統治とシーア派化を民族形成の画期とする従来の説にも、実証的な研究に基づいた再検討が求められるだろう。序章でも触れたように、先行研究は、サファヴィー朝時代に南東コーカサスとイランとの紐帯が強まったと説明する。しかし、南東コーカサスは、それ以前から「イラン世界」の一部であったし、地域のテュルク化も数世紀来の流れであった。サファヴィー朝時代、それらに決定的な変化が生じたと言えるだろうか。

確かに、地名「アゼルバイジャン」の拡大が始まったのはサファヴィー朝期であり、これは従來說を裏付けているようにも見える。しかしながら、本論文からは、従來說を否定するような事実が、いくつも確認できる。まず、地名の

拡大が16世紀後半から、すなわち、先行研究が重視するアッバース1世による移住政策が行われる以前から始まっていることが指摘できる。また、最初に「アゼルバイジャン」に包含されたのは、アルメニア人も多く暮らすガラバグ地域であった。後に「アゼルバイジャン」がクルディスタンなども含むようになるまで拡大したことも、地名が指す領域の変化と民族意識の形成とが無関係であったことを示唆している。また、南東コーカサスには19世紀の段階でも相当数のスンナ派住民が存在しており、シーア派という宗派の共通性によってアーザルバーイジャーンとの紐帯が強まったというのは無理があるように思われる。さらに繰り返しになるが、そもそも南東コーカサス現地の住民たちは、自分たちの暮らす土地を「アゼルバイジャン」とは呼んでいなかったし、アーザルバーイジャーンとの連帯意識も抱いていなかったのである（第2章）。民族意識形成期の南東コーカサスの知識人たちにも、サファヴィー朝をとりわけ重要視するような歴史観は見られない。例外はアーフンドザーデであるが、彼はシーア派を「イラン民族」の特徴として語ったのであって、サファヴィー朝も「イラン民族の象徴」として重視したのだった（第4章、終章）。

以上のことから、地名としての「アゼルバイジャン」の拡大には、少なくとも民族（エトニ）や言語、宗派の共通性は関わっていないと考えられる。ただし、サファヴィー朝への政治的な統合が、地名の拡大に影響を与えた可能性はある。

先行研究は地域的な統合と民族の形成とを並行する過程であるとみなしているが、実際に生じた事態は、むしろ逆である。本論文で確認されたように、「アゼルバイジャン人」意識の形成は、南東コーカサスの「イラン世界」からの断絶という段階を経ている。「アゼルバイジャン人」の形成は、まず「イラン人」から「カフカースのムスリム」を分離する過程であった。もともと、この民族の輪郭は、「ザカフカース」という地理区分と「イスラーム」という宗教によって決定されていたのである。民族の輪郭がアーザルバーイジャーンをも含む形に変化したのは、民族の名として「アゼルバイジャン」が採用された結果であろう。すなわち、「アゼルバイジャン」という地域が「アゼルバイジャン人」を形成したのではなく、「アゼルバイジャン人」が「アゼルバイジャン」という地域を形成したのだ。

また、「アゼルバイジャン人」は「カフカースのムスリム」の後継者であるが、両者には大きな違いもある。「カフカースのムスリム」は、主に行政単位、すなわち領域的な要素を核に想像、形成されたものであった。一方で、それを引き継いだ「アゼルバイジャン人」は、言語を核に民族の範囲を想像しようとした。すなわち、「アゼルバイジャンに住むからアゼルバイジャン人」ではなく、「アゼルバイジャン語を話すからアゼルバイジャン人」だったのであ

る。

「アゼルバイジャン人」の登場が、民族に対する抑圧が強まった1880年代から1890年代にかけてであり、ムスリムが少数派であったティフリスであったことも、興味深い事実である。また、当初のアゼルバイジャン民族主義者たちに「祖国」の感覚が希薄であるように見えるのは、彼らの活動の中心がティフリスであったことの影響と言えるかもしれない。「祖国」の感覚が明確に打ち出されるようになるのは、20世紀初頭以降、すなわち民族主義運動の中心がバクーに移って以降のことである。

（論文審査の結果の要旨）

モンゴル帝国の歴史を中心とした世界史をペルシア語で著した14世紀の医師、政治家、歴史家ラシードウッディーンの著作『集史』の第3巻イルハン国史の部分の学術的に信頼できる校訂本（アリーザーデによる）並びにロシア語訳は1957年当時ソヴィエト連邦内の一共和国であったアゼルバイジャンの首都バクーにおいて出版された。この校訂本はその後長らく歴史研究者によって利用され、その文献学的な価値は現在においても依然として高い。ペルシア語を公用語としないアゼルバイジャンでこのように重要で貴重な史料が公刊されたことはこの国の歴史研究、さらには当時のソヴィエト東洋学の蓄積の豊富さと水準の高さを世界に示す好例となった。しかし、ソ連崩壊後の1991年に完全な形で独立したアゼルバイジャンという国家やその構成民族、あるいはテュルク諸語に属するアゼルバイジャン語という言葉について一般に知られるところは少なく、この国がユーラシア、西アジアにどのような歴史的、文化的背景を持って登場してきたのかを本格的に解明した研究者はこれまでにいなかったと言ってよい。本論文の著者、塩野崎信也は日本国内でも数少ないアゼルバイジャンの歴史、言語、文学についての専門研究者であり、2010～2012年に2年以上バクーに留学し、現地の文献資料や情報を丹念に収集し、アラビア語、ペルシア語、トルコ語、アゼルバイジャン語に加えて英独仏露語の優秀な語学力を駆使して本論文を執筆した。

本論文は序章以下10章からなり、序章では本論文全体の主題となるアゼルバイジャンという民族アイデンティティの形成をめぐる問題関心が入念な先行研究紹介と共に提示される。第1章「南東コーカサス略史」、第2章「「アゼルバイジャン」とはどこか」では古代から現代に至る地域略史とアゼルバイジャンの地域的な定義が語られる。第2章は本論文中最長の部分であり、時代順に編纂著作された36点のアラビア語地理書とペルシア語辞書、計50点もの主要なペルシア語史書中のアゼルバイジャンについての記述を網羅的に分析することでこの地域の地理的、言語的、民族的な状況を明らかにしていく。著者が第2章の文献学的、実証的な分析を通じて到達した結論は、アカイメネス朝のサトラプ、アトゥルパトに由来するアゼルバイジャンという地名は少なくとも15世紀頃まで諸資料において専ら現在のイラン領「アーザルバーイジャーン」を指す場合に用いられ、その外縁部、北側に広がる現在のアゼルバイジャン共和国の領域は「シルヴァーン」「アッラーン（ガラバグ）」と呼ばれるのが通例であり、民族、言語の面からも特別な連帯意識は見られなかったというものである。

第3章から第8章までは現在のアゼルバイジャンの領域と関連を持つ19世紀前半から20世紀初めまでの現地知識人の著作物と彼らが発行人となったり、主筆を務めた定期刊行物『種蒔く人』、『托鉢』、『モッラー・ネスレッディーン』等を主要な素材として、アゼルバイジャンという地理的名称の適用範囲が広がり、また知識人の間で文化や言語を基盤とした民族意識が形成される過程が実証的に検討される。著者がこの部分で取り上げた現地知識人たちとは、第3章のバキュハノフ（1794-1847）、第4章のアーフンドザーデ（1812-78）、第5章のゼルダービー（1837-1907）、第6章の



ウンスィーザーデ（1854生）、第7章のカーゼム・ベク（1802-70）、第8章のメンメドグルザーデ（1869-1932）等である。彼らのうちアーフンドザーデは戯曲作家として著名であり、レールモントフやプーシキンと親交を持っていたが、他の5名の業績や生涯については、著者が本論文において初めて本格的な紹介を行なった。

本論文の著者が結論でまとめている部分によれば、1826-7年の第二次ペルシア・ロシア戦争の結果、南東コーカサス（ザカフカース）地方はロシアの政治的・軍事的支配下に置かれるようになり、上記の現地知識人たちはいずれもこのような状況下で民族的、文化的アイデンティティを模索しなければならなかった。1875年に創刊された『種蒔く人』誌においてその発行人であったゼルダービーは自らの所属する民族を「テュルク語を話すカフカースのムスリム」と明確に定義し、この時期以降この認識が知識人の間に広まり、1883年にウンスィーザーデによって発行され始めた『托鉢』誌上では、すでに1846年言語学者カーゼム・ベクによって提唱されていた、従来の「タタール語」や「トルコ語」に替わる「アゼルバイジャン語」という言語名がカフカースのムスリムの多くが用いる言語であるという認識が表明されたという。20世紀の初頭には「アゼルバイジャン人」「アゼルバイジャン語」という表現が普及・定着するようになり、ロシア革命を経た1936年スターリンの指導するソヴィエト体制下でアゼルバイジャンという国家、民族、言語が確定したのである。

本論文の論旨は極めて明快であり、図表を巧みに用い、原資料に掲載されたイラストや現地で撮影した写真を随所に使用するなど読み易さに工夫が凝らされ、全体として完成度の高い労作となっている。今後のアゼルバイジャン史研究の基礎となることは言うまでもなく、前世紀以来世界の各地で成立、解体、再編を繰り返し、様々な政治的、文化的、社会的な問題を引き起こす要因ともなっている民族や国家などの概念を普遍的、歴史的に考察する際にも重要な示唆を与えてくれる論考となろう。

本論文に望まれる検討課題をさらに敢えて付加するならば、南東コーカサスにおけるムスリムたちの歴史を通じて手強い競合者、隣人であり続けるグルジア人、アルメニア人の視点からアゼルバイジャン人という民族意識や国家の形成がどのように認識されていたのか、さらには上記アラーザーデのような、すでに確立したアゼルバイジャン人という民族意識を有する東洋学者たちが自国史を対外的に紹介、主張するために払った努力がいかなるものであったかという状況を明らかにすることであろうが、これらの課題も本論文の著者により遠からず解明されることを期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、平成28年2月22日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。